



田島 征彦 ⑩
絵と文

灰谷さんが目の前に

ほくは今、沖縄県豊見城市座安といいでいて、こ

の原稿を書いている。美術大学の学生時代からの友

人、長尾紀寿くんの住居である。長尾くんは定年退職しているが、10年前まで沖縄県立芸大の教授だった。在職中に、ほくを非常勤講師として、1年に1度、2週間の集中授業をさせてくれた。あれから、久しぶりに、ほくはやってきた。次の絵本の舞台を沖縄に選んだからだ。当分の宿は長尾宅に居候している。長尾くんも、ほく以上に沖縄が好きで、芸大の勤めが終わっても、家族と別居までして豊見城に住んでいる。ほくは図々しく、長尾くんは車の運転をしてもらって、あちこちで出掛けている。昨日は辺野古に行った。新しいアメリカ軍の基地を造ろうとする現場を見てきた。国の天然記念物のシユンロンが海遊する美しい海だ。多種多様な生き物の貴重な海だ。その中の半分が新しく発見された生き物だという。3歳のまだ名前も付けられていないナマコが棲んでいるんだ。その海を埋めて、戦争の訓練をするという。

ほくが初めて沖縄へ渡ったのは1978年だった。美しい島、海、亜熱帯の植物たちに魅せられて、「とんとんみーときじむな」という絵本が完成するまで8年間20回以上も沖縄へ通った。

たのは96年だった。今日は豊野高市の佐喜真美術館へ行ってきた。丸木位里・俊の「沖縄戦の丸」の収納から創られた美術館だ。今月は「沖縄戦の図」の他に浜田知明の「初年兵哀歌」のシリーズと、この美術館の「日本最大のコレクション」であるゲーテ・コルヴィッツの作品も陳列されている。ほくは感動で熱くなって、外の空気にあたるために芝生の上に座った。佐喜真通夫館長も出て来られて、浜田知明の作品について興味深い話をしてくれた。「一台の車が到着して、降りてきた熟年の婦人が芝生の隅にしゃがみこんで、何かを写真に撮っている。佐喜真さんが近づいて、話している。すぐ隣接している普天間基地からオスプレイが突然飛び発ったために物凄い爆音で話はずかしく聞かえない。長尾くん2人で近づいていくと、芝生の中にきたらしい草を見つけて、頻りにシャッターを押している。菌類に興味があるらしい。オスプレイの下で呑気な婆さんである。佐喜真さんが、ほくを紹介してくれて、沖縄の絵本を創るために来ていることを話すと、車へ引き返して、彼女は自作の写真集を持ってきた。電話帳のような厚さの写真集だ。「命と暮らしを守る沖縄の闘い」辺野古・高江・普天間。彼女、兼城淳子さんは、何十年も、基地の暴力から、子どもたちを守る闘いをしてこられた。元教師だった。次の機会にやんぼろの森を案内してくれるという、すばらしい女性だ。



おのころ島(淡路島)の家を灰谷さんから譲り受けて15年になる。その間、灰谷さんは逝ってしまったが、今、ほくの新しい絵本の出版の時、目の前に熱っほく現れてくれたような気がした。

(絵本作家) 二 田島 征彦